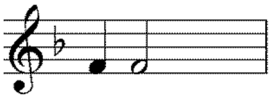
主　日　前　晩　課

第３調

注意　譜面中、五線譜上に　‖o‖　とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、氣をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

２０２４年２月９日　釧路管轄司祭ステファン内田　作成

司祭) 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、



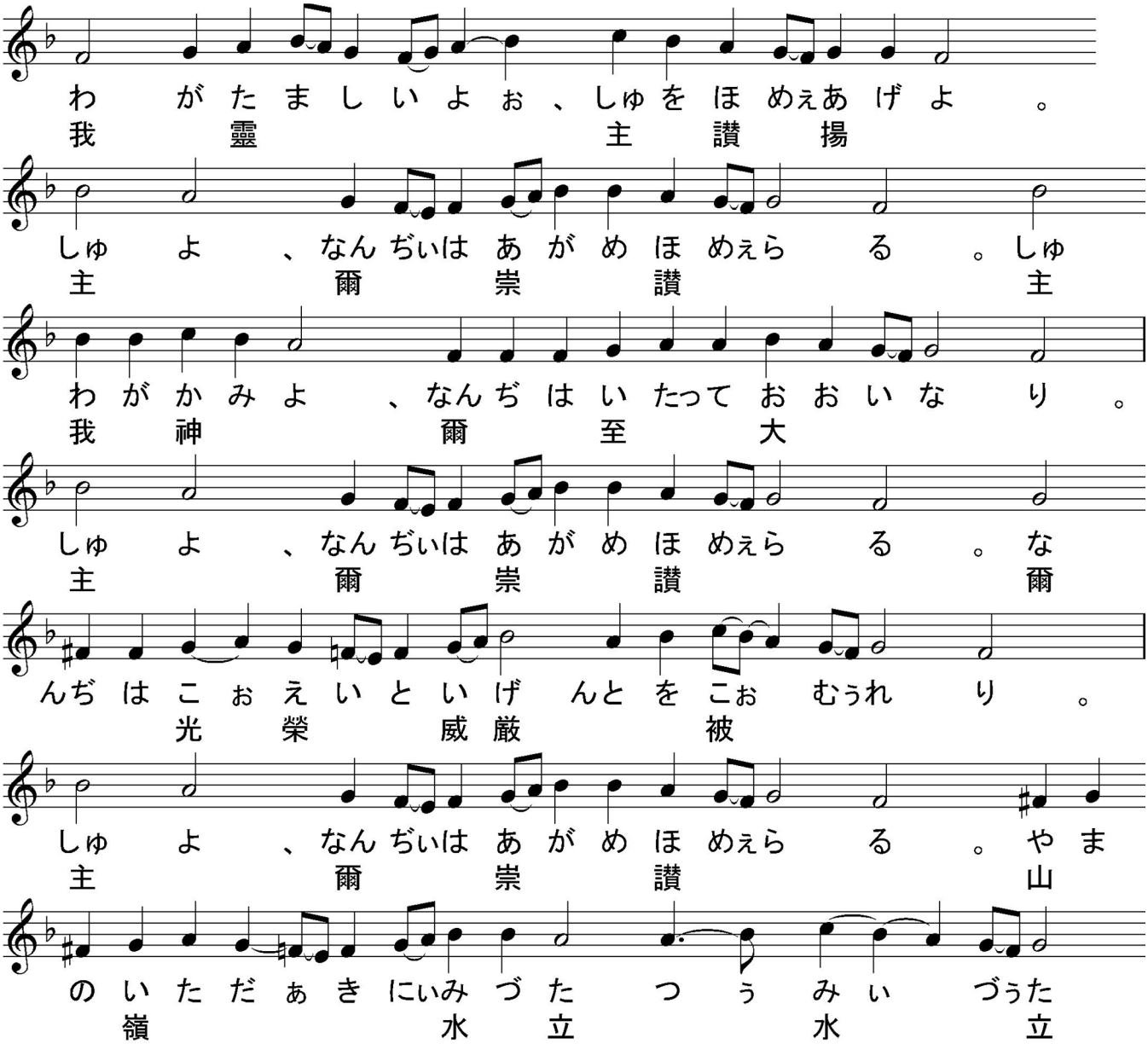
司祭) 來れ、我等の王・神に叩拜せん、

來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん、

來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん、

來れ、彼に叩拜俯伏せん、

【 第103聖詠（首誦聖詠：我が靈よ主を讃め揚げよ） 】



つ　。しゅ　ぅよ　、なん ぢのしわざぁは　ぁ　き　ぃ　い　な
主　爾　工　業　奇　異

り　。

やまのあいだぁにぃみ　づながる　ぅ、みぃ
山　間　水　流　水

づなぁが　る　。しゅ　ぅよ　、なん ぢのしわざぁは　ぁ　き　ぃ
流　主　爾　工　業　奇

い　な　り　。
異

みなちえ　をもって　つくれ　り　ちえ
皆　智慧　以　作　智慧

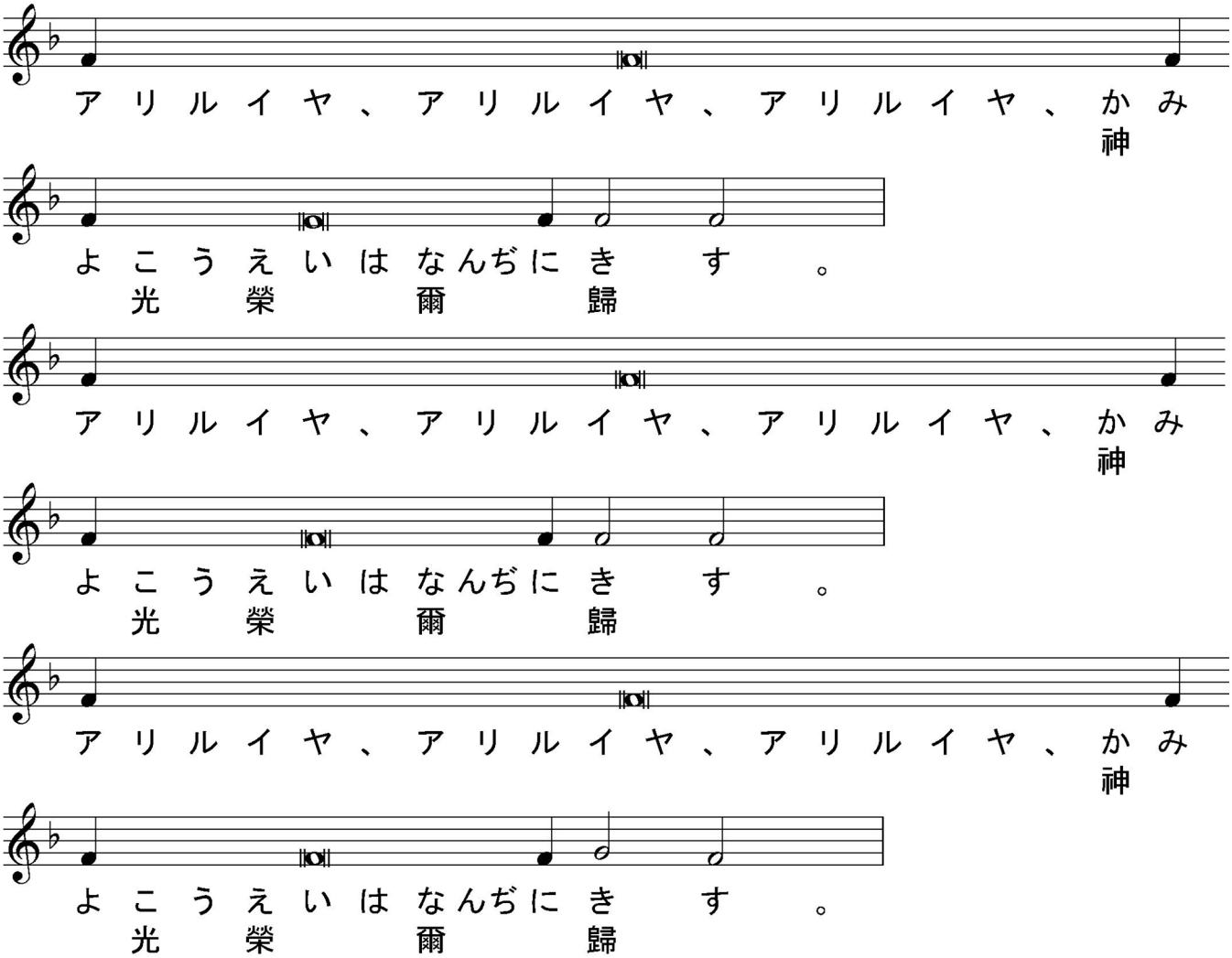
をもって　つくぅれ　り　。
以　作

こぉえ　いはな　んぢ　ばんぶ　つをつ　く　り　ししゅにぃき
光　榮　爾　萬　物　作　主　歸

す　。

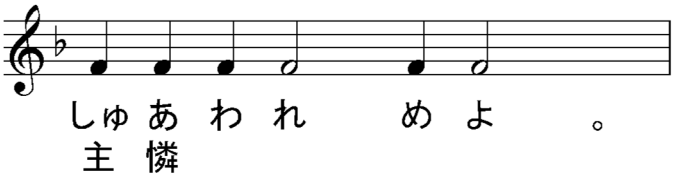
こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光　榮　父　子　聖　神　歸　今

いつもよよ　に、アミ　ン。
何時　世世

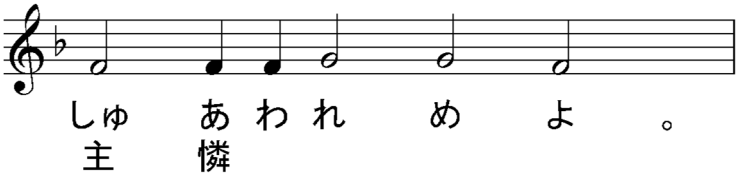


【　大聯禱　】

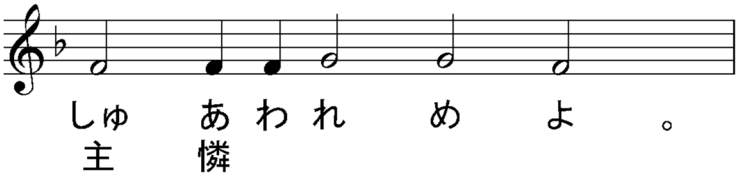
司祭）我等安和にして主に禱らん、



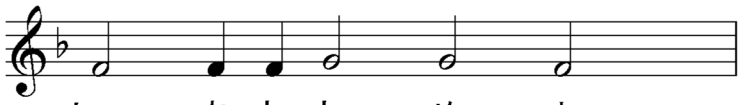
司祭）上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭）全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、

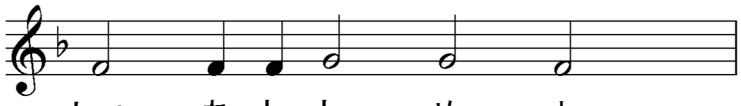


司祭）此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、



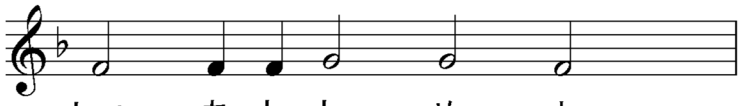
しゅ　あ わ れ　め　よ　。
主　憐

司祭）教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



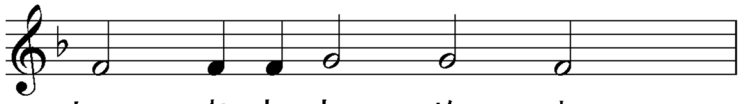
しゅ　あ わ れ　め　よ　。
主　憐

司祭）我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



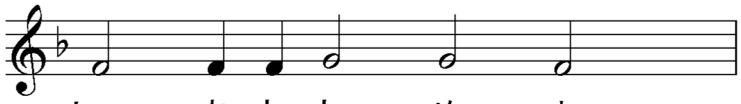
しゅ　あ わ れ　め　よ　。
主　憐

司祭）此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



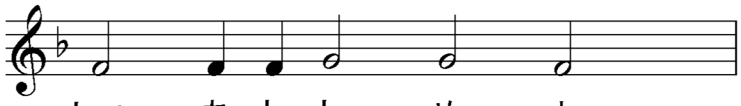
しゅ　あ わ れ　め　よ　。
主　憐

司祭）氣候順和、五穀豐穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



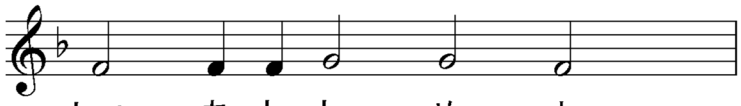
しゅ　あ わ れ　め　よ　。
主　憐

司祭）航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び彼等の救の爲に主に禱らん、



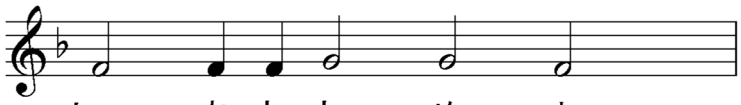
しゅ　あ わ れ　め　よ　。
主　憐

司祭）我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



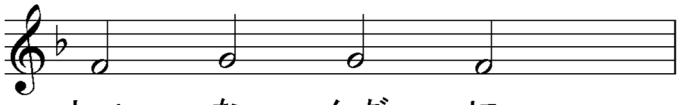
しゅ　あ わ れ　め　よ　。
主　憐

司祭）神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



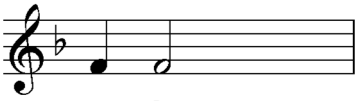
しゅ　あわれ　め　よ　。
主　憐

司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



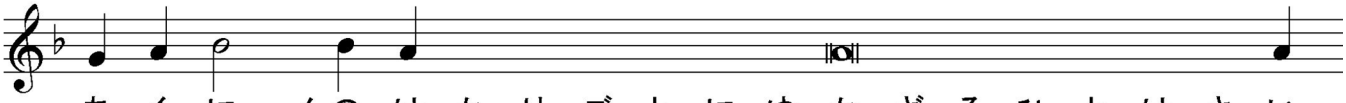
しゅ　な　んぢ　に　。
主　爾

司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

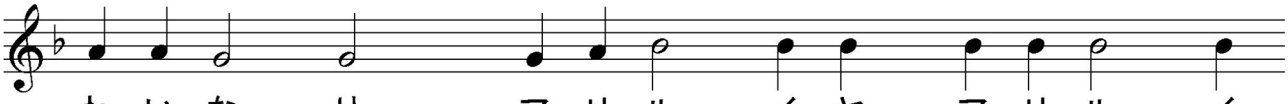


ア　ミ　ン。

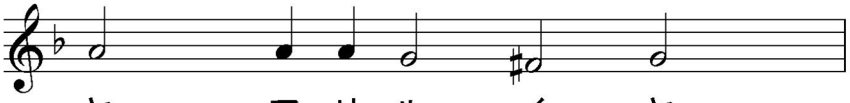
【　第一カフィズマ　第一段　】



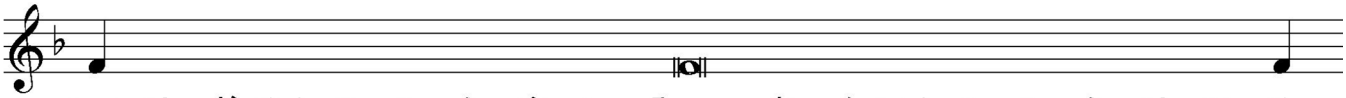
あ　く　に　んの　は　か　り　ご　と　に　ゆ　か　ざ　る　ひ　と　は　さ　い
悪　人　謀　行　人　福



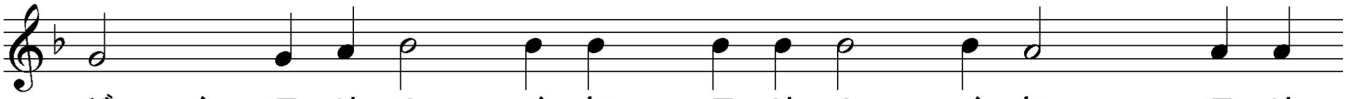
わ　い　な　り　、ア　リ　ル　イ　ヤ、ア　リ　ル　イ



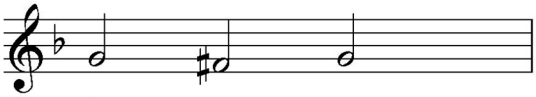
ヤ　、ア　リ　ル　イ　ヤ　。



しゅは　ぎじんの　み　ち　を　し　る　、　あ　くにんの　み　ち　は　ほ　ろ
主　義人　途　知　悪　人　途　滅



び　ん、ア　リ　ル　イ　ヤ、ア　リ　ル　イ　ヤ　、ア　リ



ル　イ　ヤ　。

おそれてしゅにつとめよ、おののきてそのまえ
畏　主　勤　戦　其　前

によろこべよ、アリルイヤ、アリルイ
喜

ヤ、アリルイヤ。

およそかれをたのむものはさいわいなり、
凡　彼　恃　者　福

アリルイヤ、アリルイヤ、アリル

イヤ。

しゅやたてよ、わがかみや、われをすくいた
主　立　吾　神　我　救　給

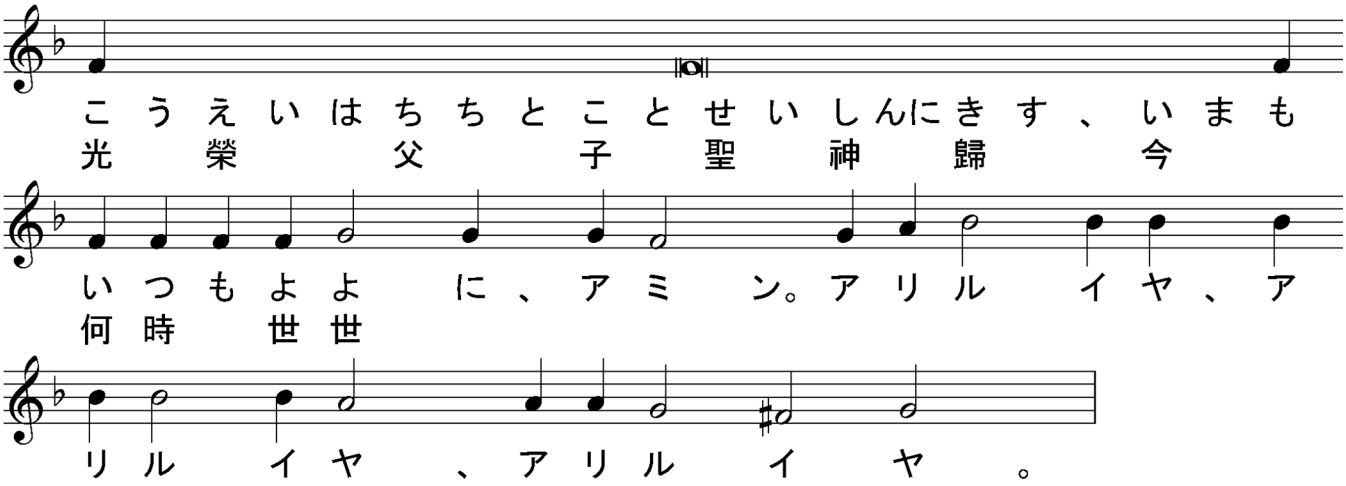
まえ、アリルイヤ、アリルイヤ、

アリルイヤ。

すくいはしゅによるなんぢのこうふくはなんぢのた
救　主　依　爾　降　福　爾　民

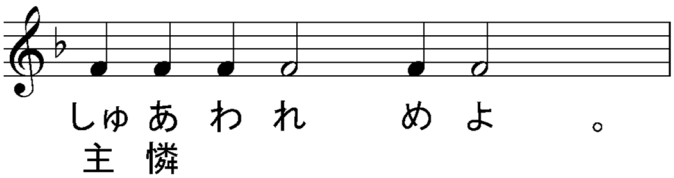
みにあり、アリルイヤ、アリルイ
在

ヤ、アリルイヤ。

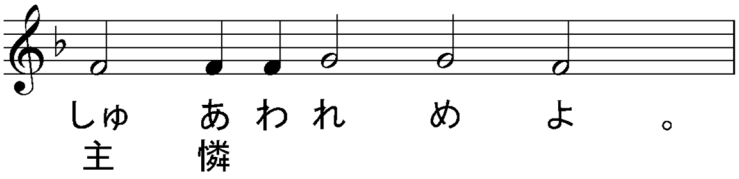


【　小聯禱　】

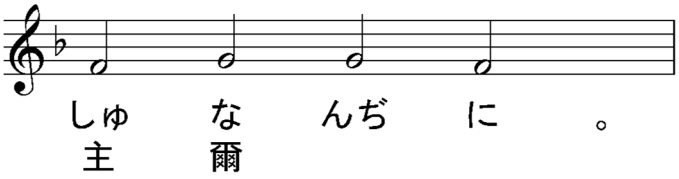
司祭）我等復又安和にして主に禱らん、



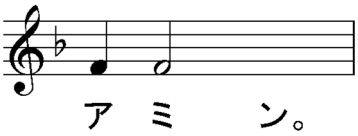
司祭）神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



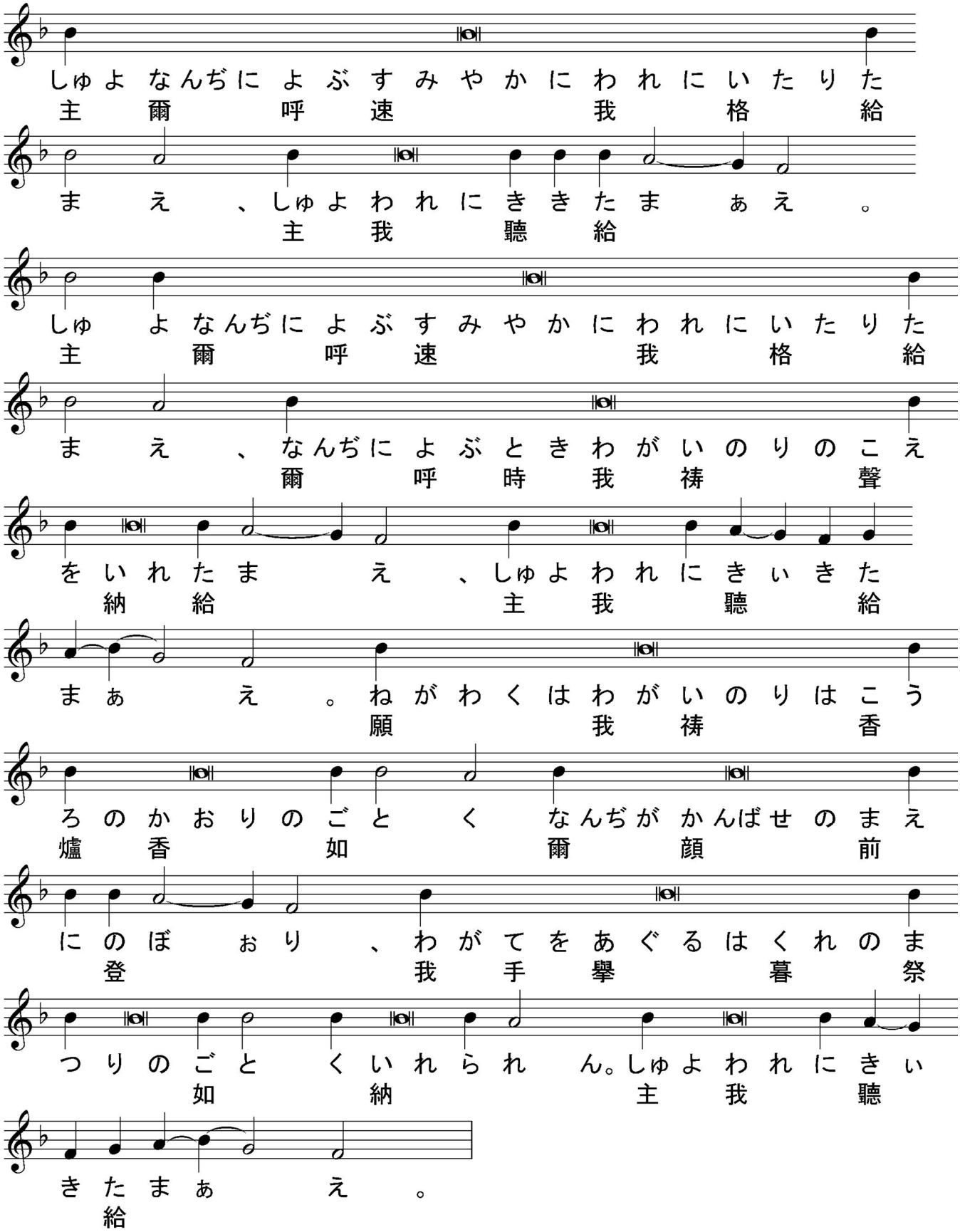
司祭）至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭）蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【　第１４０聖詠（主よ爾に籲ぶ）　第３調　】



誦經）主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言に傾きて、不法を行う人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と美しき膏、我が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の惡事に敵す。彼等の首長は巖石

の間に散じ、我が言の柔和なるを聽く。我等を土の如く斫り砕き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退くる毋れ。我が爲に設けられし弶、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第１４１聖詠 】

我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は我の避所なり、生ける者の地に於いて我の分なり。我が呼ぶを聽き給え、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

句⑩ 我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讃榮せしめ給え。

讃詞⑩ハリストス救世主よ、爾の十字架にて死の權は滅され、惡魔の誘惑は空しくせられたり。信を以て救わるる人の族は恒に歌を爾に奉る。

句⑨ 爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

讃詞⑨主よ、爾の復活にて萬有は照され、樂園は再開かれたり。悉くの造物は爾を讃め揚げて、恒に歌を爾に奉る。

句⑧ 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聽き給え、

讃詞⑧我は父及び子の能力を崇め、聖神の權を歌い、分れず造られざる神性、一體の三者、世世に王たる者を讃め揚ぐ。

句⑦ 願わくは爾の耳は我が禱の聲を聽き納れん。

讃詞⑦ハリストスよ、我等爾の尊き十字架に伏拜し、爾の復活を歌頌讃榮す、蓋爾の傷に因りて我等皆癒されたり。

句⑥　主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

讃詞⑥我等は童貞女より身を取りし救世主を歌う、蓋我等の爲に十字架に釘せられ、三日目に復活して、我等に大なる憐を賜えり。

句⑤　我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

讃詞⑤ハリストスは降りて、地獄に在る者に福音して曰えり、勇めよ、今勝てり、我は復活なり、我死の門を破りて、爾等を引き上げん。

句④　我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

讃詞④ハリストス神よ、我等爾の至淨なる家に立つに堪えざる者は晩の歌を奉りて、深き心より籲ぶ、爾の三日目の復活にて世界を照しし人を愛する主よ、爾の民を爾の諸敵の手より脱れしめ給え。

句③　願わくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖わん。

讃詞③童貞女よ、我何事に遇いても爾の神聖なる恩寵を呼ぶ者に慈憐を垂れて、速に聽き給え、蓋我が靈の望を一切爾に負わせたり。我萬事に於て爾の神聖なる慮を恃む、爾我に将來の光榮及び神聖なる生命をも獲しめ給え。

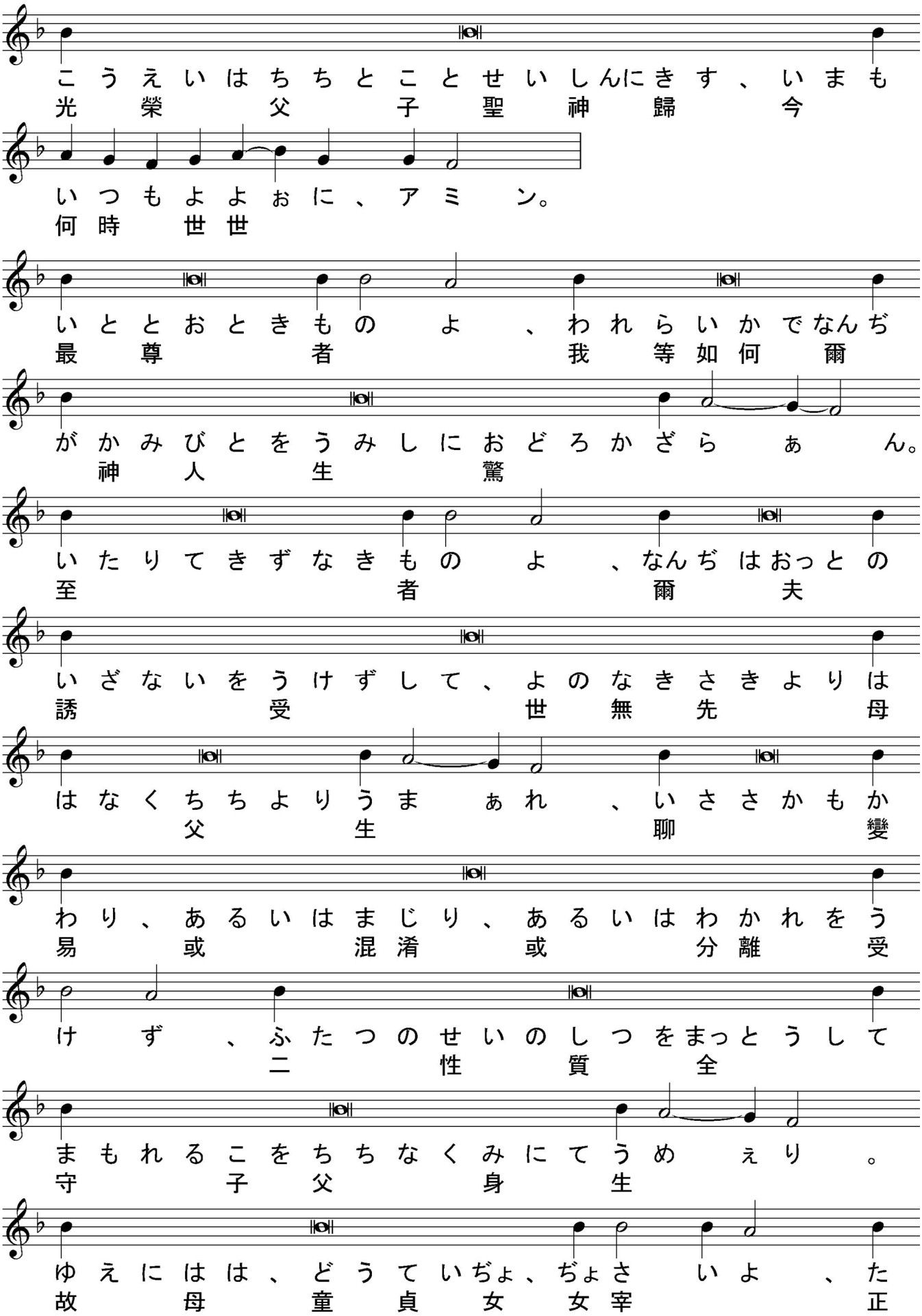
句②　萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

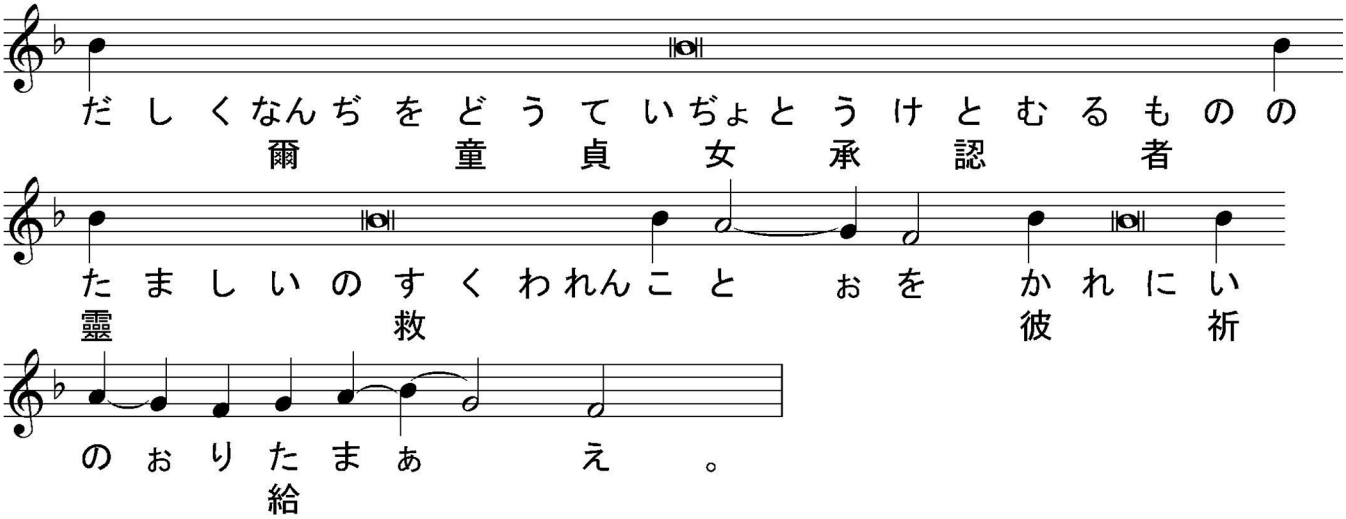
讃詞②生神女よ、我が諸慾の炭は我の中に燃えたり。祈る、女宰よ、怒と憤、沉湎と邪淫、貪婪と頑固、怠惰と煩悶、驕慢と良心に戻ることより吾が靈を脱れしめて、我を救い給え。

句①　蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

讃詞①我等皆潔き良心を以て生神女の前に俯伏して、心の内より絶えず呼ばん、聖なる女宰よ、我等衆を慍怒と忿恨、災禍と誘惑より救い給え。蓋我等は爾を垣墻及び保固として獲て、爾の帷幪の下に趨り附きて、爾に依りて救わる。

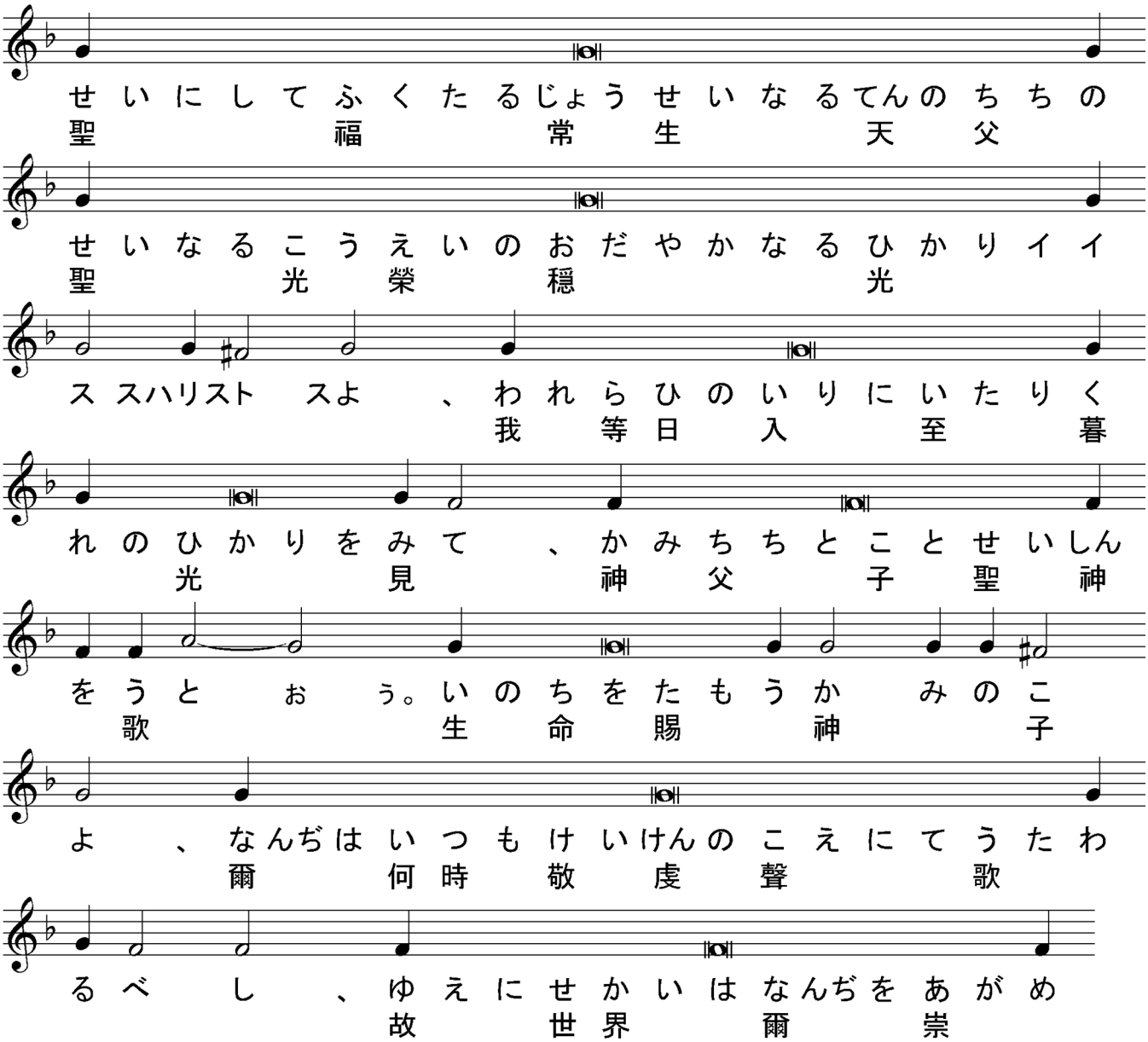
【　ドグマチカ（生神女讃詞）第３調　】

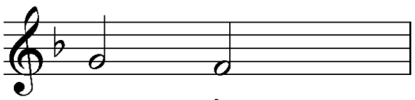




司祭) 睿智(えいち)、粛(つつし)みて立(た)て、

【　聖ソフロニイの祝文　】



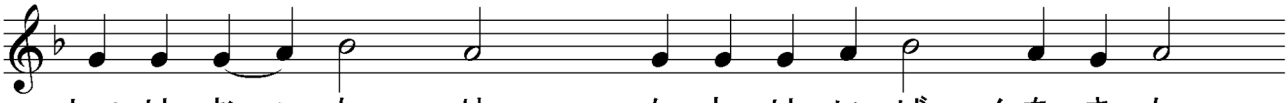


ほ　む　。
讃

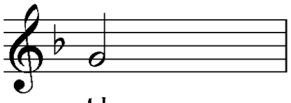
【　大プロキメン　第６調　】

司祭）謹(つつし)みて聽(き)くべし、衆人(しゅうじん)に平安(へいあん)、睿智(えいち)、

誦經）提綱(プロキメン)、主(しゅ)は王(おう)たり、彼(かれ)は威嚴(いげん)を衣(き)たり、

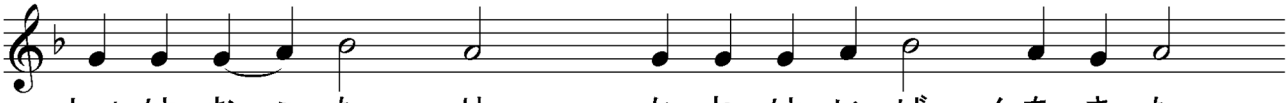


しゅ は お ぅ た り 、 か れ は い げ んを き た
主 王 彼 威 嚴 衣

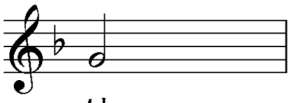


り 、

誦經）主(しゅ)は能力(のうりょく)を衣(き)、又之(またこれ)を帶(おび)にせり、

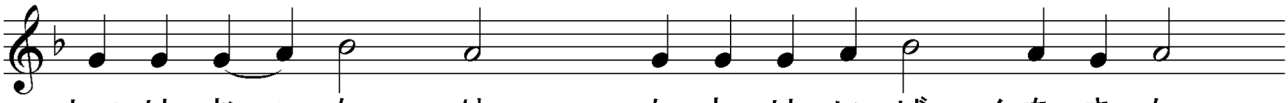


しゅ は お ぅ た り 、 か れ は い げ んを き た
主 王 彼 威 嚴 衣

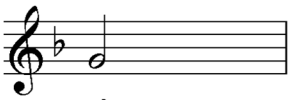


り 、

誦經）故(ゆえ)に世界(せかい)は堅固(けんご)にして動(うご)かざらん、

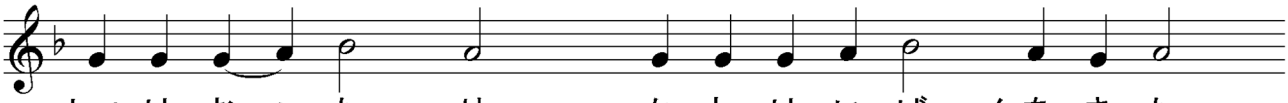


しゅ は お ぅ た り 、 か れ は い げ んを き た
主 王 彼 威 嚴 衣

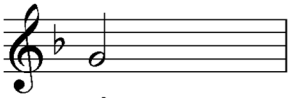


り 、

誦經）主(しゅ)よ、聖德(せいとく)は爾(なんぢ)の家(いえ)に屬(ぞく)して永遠(えいえん)に至(いた)らん、

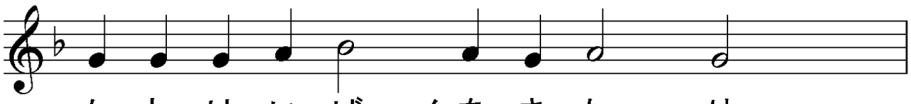


しゅ は お ぅ た り 、 か れ は い げ んを き た
主 王 彼 威 嚴 衣



り　、

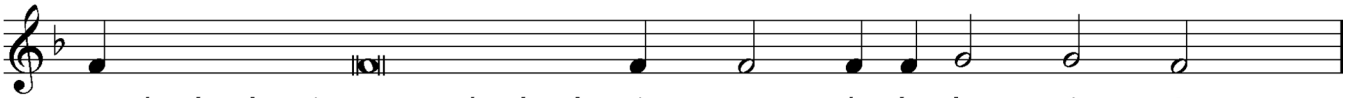
誦經）主は王たり、



か れ は い げ んを き た り 。
彼 威 嚴 衣

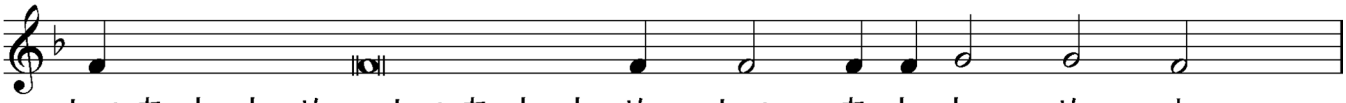
【 重聯禱 】

司祭）神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



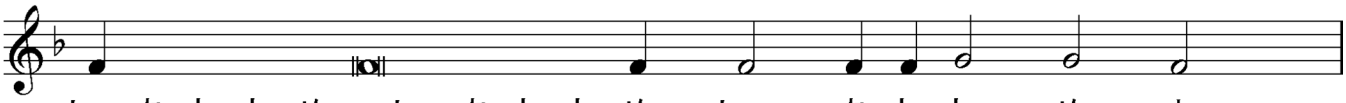
しゅあ わ れ め 、しゅあ わ れ め 、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭）又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



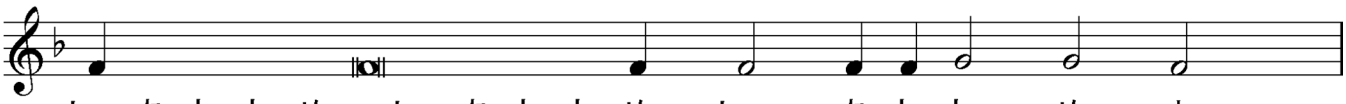
しゅあ わ れ め 、しゅあ わ れ め 、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭）又教曾を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



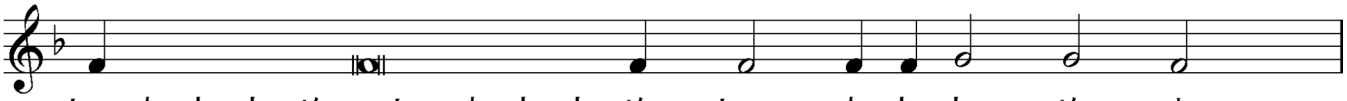
しゅあ わ れ め 、しゅあ わ れ め 、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭）又恒に記憶せらるる福たる此の聖堂の建立者、及び既に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に禱る、

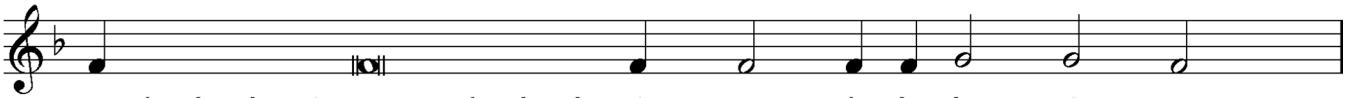


しゅあ わ れ め 、しゅあ わ れ め 、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

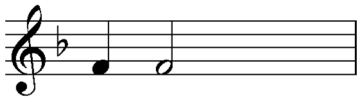
司祭）又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐、生命、平安、壮健、救贖、眷顧、寛宥、及び諸罪の赦を賜わんが爲に禱る、



司祭) 又此の聖堂に物を獻り、善業を行い、之に労し、之に歌い、及び此に立ちて爾の大にして豐なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



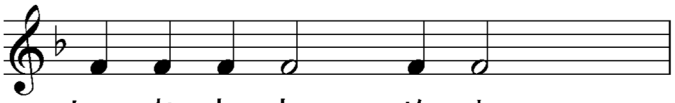
誦經) 主よ、我等を守り罪なくして此の晩を度らせ給え、主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ爾の名は世世に尊み歌わる、アミン。

主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え、主よ、爾は崇め讃められる、爾の誡を我に訓え給え、主宰よ、爾は崇め讃められる、爾の誡を我に悟らせ給え、聖なる者よ、爾は崇め讃められる、爾の誡にて我を照し給え。

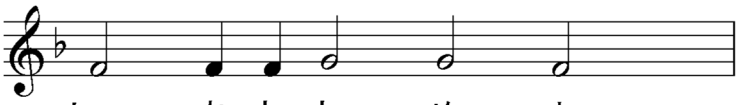
主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ、讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

【 増聯禱 】

司祭) 我等主の前に吾が晩の禱を増し加えん、

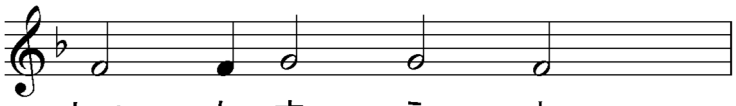


司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



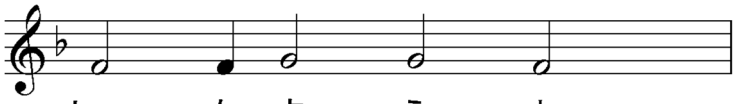
しゅ　あ わ れ　め　よ　。
主　憐

司祭) 此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



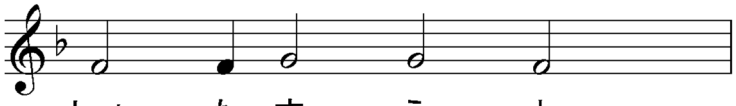
しゅ　た ま　え　よ　。
主　賜

司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



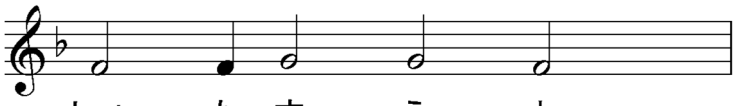
しゅ　た ま　え　よ　。
主　賜

司祭) 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



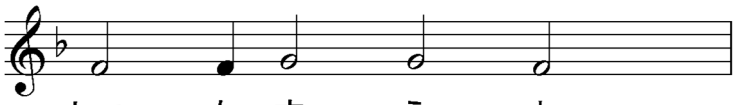
しゅ　た ま　え　よ　。
主　賜

司祭) 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



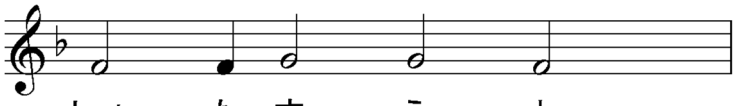
しゅ　た ま　え　よ　。
主　賜

司祭) 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



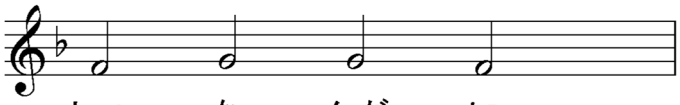
しゅ　た ま　え　よ　。
主　賜

司祭) 我等の生命の終がハリスティアニンに適い、疾なく、恥なく、平安なること、及びハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



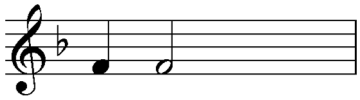
しゅ　た ま　え　よ　。
主　賜

司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



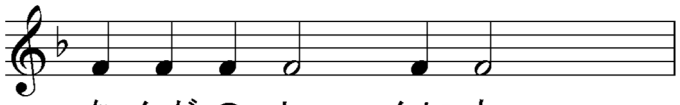
しゅ　な　んぢ　に　。
主　爾

司祭）蓋　爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾　父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



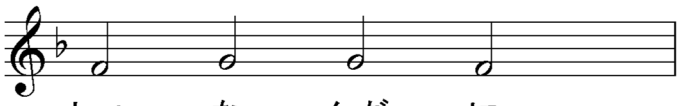
ア　ミ　ン。

司祭）衆　人に平安



なんぢのし　んにも　。
爾　神

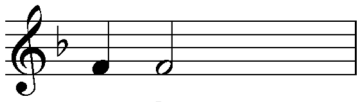
司祭）我等の首を主に屈めん



しゅ　な　んぢ　に　。
主　爾

司祭）（默經　主我が神、天を屈めて人類を救うが爲に降りし者よ、爾の諸僕と爾の嗣業とを顧み給え、蓋　爾の諸僕は、爾畏るべくして人を愛する審判者に首を屈め、己の頸を伏し、人の助を俟たず、乃　爾の憐を俟ち、爾の救を仰ぐ、求む彼等を恒に護り、彼等を此の夕にも、次て至る夜にも、凡の敵凡の惡魔の姦謀と虚しき思慮と惡しき意念とより護り給え、）

願わくは爾　父と子と聖神の國の權柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世世に、



ア　ミ　ン。

【　挿句讚頌　第３調　】

誦經）己の苦にて日を晦くし、己の復活の光にて萬物を照ししハリストス、人を慈む主よ、我等の晩の歌を納れ給え。

句　主は王たり、彼は威厳を衣たり。

讃頌　主よ、爾が生命を施す復活は全世界を照して、爾の朽ちたる造物を興せり。故に我等アダムの詛を脱して呼ぶ、全能の主よ、光榮は爾に歸す。

句　故に世界は堅固にして動かざらん。

讃頌　爾は變易せざる神にして、身にて苦を受けて變易せり。造物は爾が十字架に懸れるを見るに堪えずして、恐懼に由りて變じ、歎息して爾の恒忍を讃め揚げたり。爾は地獄に降り、三日目に復活して、世界に生命と大なる憐とを賜えり。

句　主よ、聖德は爾の家に屬して永遠に至らん。

讃頌　ハリストスよ、爾は我が族を死より救わん爲に死を忍び、三日目に死より復活して、爾を神と識認せし者を己と偕に復活せしめて、世界を照し給えり。主よ、光榮は爾に歸す。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

生神女讃詞　爾は種なく聖神に由りて、父の旨を以て、神の子、世の無き先に母なく父より生れし者を妊み、我等の爲に父なく爾より在りし者を身にて生み、嬰たる者を乳にて養えり。彼に我等の靈を諸難より脱れしめんことを息めずして禱り給え。

奉神者シメオンの祝文　主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝かしむ。蓋我が目は爾の救を見たり。爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人を照すの光、及び爾の民イズライリの榮なり。

聖三祝文　聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

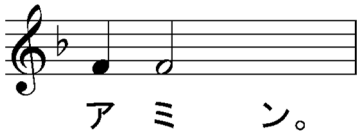
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。

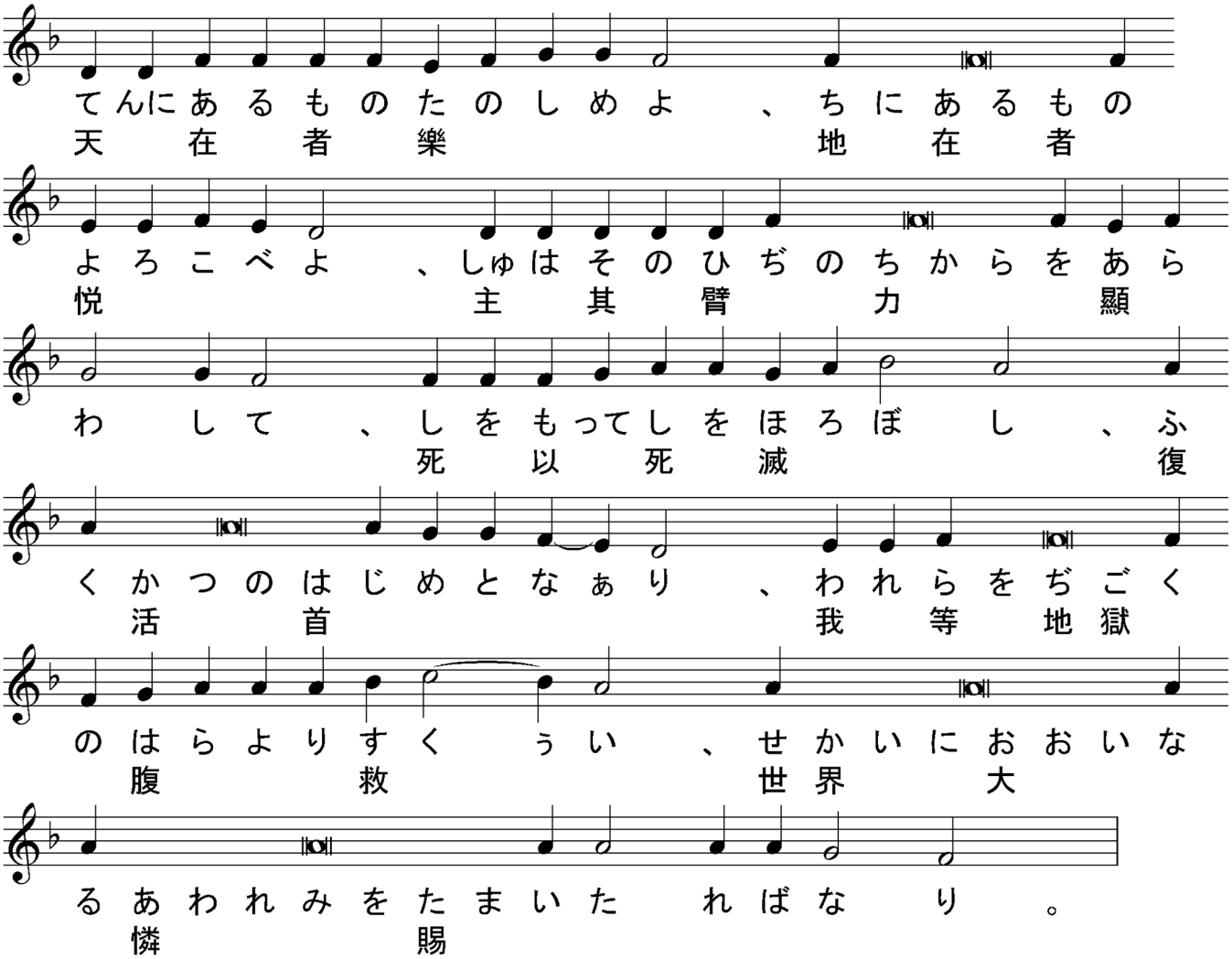
光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

天に在す我等の父よ、 願 は 爾 の名は聖とせられ、 爾 の國は來り、 爾 の旨は天に 行 わるるが如く、地にも 行 われん。我が日 用の糧を今 日 我等に與え給え。我等に 債 ある者を我等免すが如く、我等の 債 を免し給え。我等を 誘 に 導 かず、猶 我等を 凶 惡より救い給え。

司祭) 蓋 國と權 能と光 榮は 爾 父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。



【 主日の發放讚詞 第３調 】



【 生神女讚詞 第３調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、い
光榮父子聖神歸今

まもいつもよよにぃ、アミン。
何時世世

しょうしんどうていぢょよ、われらはなんぢわが
生神童貞女我等爾我

やからのすくいのためにてんたつするもぉの
族救爲転達者

をほめうとぉぅ。なんぢのこわがかみ
讃歌爾子吾神

はひとをあいするによりて、なんぢより
人愛因爾

とりしみぃにぃて、じゅうじかのくるしみを
取身十字架苦

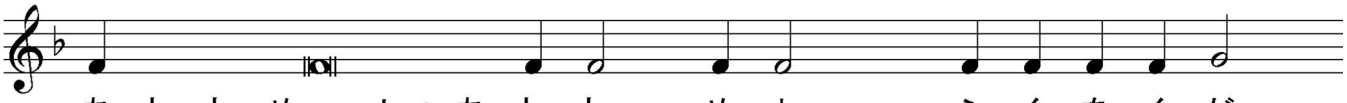
うけ、われらをほろびよりすくいた
受我等滅亡救

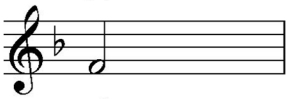
ればなぁり。

司祭) ハリストス神(かみ) 我等(われら)の恃(たのみ)よ、光榮(こうえい)は爾(なんぢ)に歸(き)す、光榮(こうえい)は爾(なんぢ)に歸(き)す、

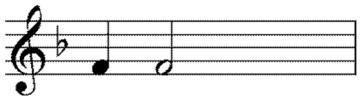
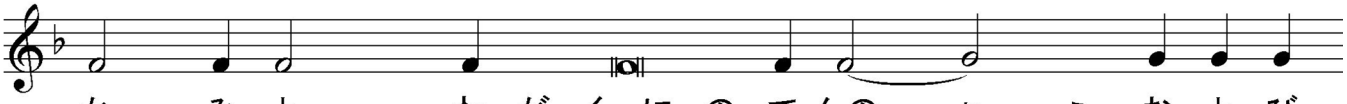
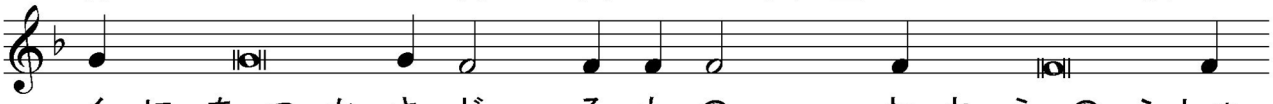
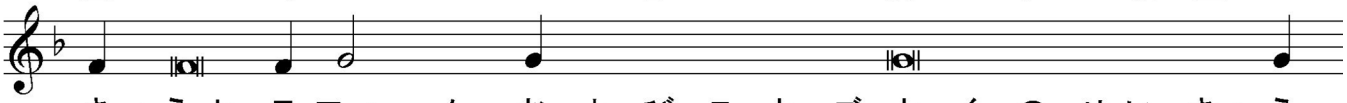
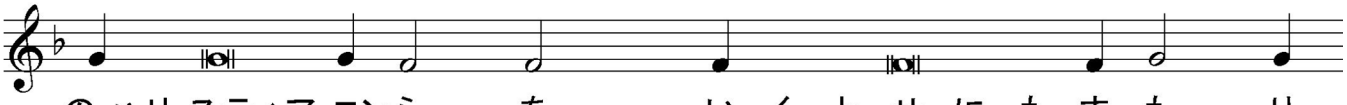
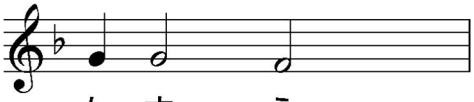
こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮父子聖神歸今

いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ
何時世世主憐主





司祭) 死より復活せしハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母、光榮にして讃美たる聖使徒、克肖捧神なる我諸神父、（ 某 ）及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん。彼は善にして人を愛する主なればなり、



【 萬壽詞 】